

三田藩主の元旦にみる三田と鳥羽のつながり

三田藩主九鬼氏の元旦は、明け六つ時(午前6時頃)の神仏参拝から始まります。儀式の次第を記した資料によれば、まず田城宮たしろのみやと天満神社あまのまんじんじゃに参拝、その後、菩提寺心月院ぼだいじしんげついんと桃禅院とうぜんいん(現在の西山にあった九鬼氏ゆかりの寺院)に参詣するとあります。そして五つ時(8時頃)から総登城した家臣達の年賀を受けます。

一年の最初に藩主自らが参拝した田城宮ですが、その名称は陣屋の施設や周辺の寺社を描いた古絵図にもみえず、所在が現時点でも明確ではありません。仮に資料に記された順番が参拝の順序だとするならば、田城宮は参拝先の内で陣屋に最も近い位置になり、あるいは陣屋の内部に祀られていたのかもしれませんが。

ところでこの田城宮は、九鬼氏ゆかりの鳥羽から勧請され祀られた社やしろだと考えられます。九鬼氏の由緒によると、紀伊から熊野灘を渡って志摩半島に進出し、七島党しちとうとうなどの土豪を勢力下に収めながら次第に北上した九鬼氏が、鳥羽の地で最初に拠点として構えたのが田城の城でした(『三田市史』第4巻30号資料)。また水軍の将として名をはせることになる九鬼嘉隆よしたかが、不動の地位を確立したのも田城の地でした。その後、嘉隆は鳥羽城に拠点を移しますが、田城の城跡には惣領権現そうりょうごんげんという神が祀られました。そして九鬼氏が三田てんぶうに転封となった後も江戸時代の末に至るまで、藩主は正月には必ず代参の家臣を派遣していました。名称からみて三田の田城宮はこの惣領権現を招いた社ではないかと考えられるのです。九鬼氏が田城宮の祭祀を重視した理由はいくつか考えられますが、九鬼氏はその祭祀を通じて鳥羽とのつながりを持ち続けたのです。

なお参勤交代で藩主が江戸にいる年の正月は、幕府に対する儀礼が中心となりますが、そこでも故郷ふるさとの鳥羽とのつながりがみられます。すなわち年頭には三田の領民から江戸の藩主にアワビとアユが献上されたのですが、これらは鳥羽時代のしきたりが三田に引き継がれたものだと言います。江戸時代、「海」から「山」への記憶はこのような形で引き継がれていたのです。